

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 13 日現在

機関番号：10101

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23520654

研究課題名(和文) 英語による英語授業における学習スタイルの影響と変容

研究課題名(英文) A Learning style's effects on and changes in all-English classes.

研究代表者

河合 靖 (KAWAI, Yasushi)

北海道大学・大学院メディア・コミュニケーション研究院・教授

研究者番号：60271699

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 600,000円、(間接経費) 180,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、英語による英語授業と学習者の内向的学習スタイルの関係、簡易英語ディベートによる英語による授業への適応を考察することにある。調査1では、日本人英語学習者の外向性・内向性の下位要因を探るとともに、この学習スタイルの質問紙を開発した。調査2では、内向性と学習活動の嗜好性との相関、ディベート前後における学習活動の嗜好性と性格の変化や英語による授業への適応について考察した。研究の結果、内向性・外向性は比較的安定した学習スタイル要因であるが、学習活動の嗜好性との関連は高くないことが分かった。しかし、統計的に有意ではなかったものの、学習活動への適応を示す情意反応の変化が傾向として見られた。

研究成果の概要(英文)：This investigation intends to examine the relationship between introversion and attitudes towards all-English activities, and to observe how students adapt to English-only classes after experiencing pick-up debate. While exploring factors for extrovert-introvert learning styles in study 1, the questionnaire for study 2 was developed. Study 2 examined the correlation between introversion and attitudes towards learning activities. It also investigated post-debate experience changes in personalities, attitudes toward classroom activities, and adaptation to lessons in English. The results indicated that introversion and extroversion were comparatively stable factors, and that the correlation between personality types and attitudes toward classroom activities was not strong. Nonetheless, a change in sentiment reaction, which shows adaptation to learning activities, was seen as a general trend although it was not statistically significant.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・外国語教育

キーワード：学習スタイル 内向性・外向性 英語学習 スピーキング 直接教授法 適応

1. 研究開始当初の背景

(1) 全人的第二言語習得観

応用言語学・第二言語習得研究では、言語運用能力発達の普遍的道筋の解明から、個人差要因の理解を含む全人的アプローチへ興味が行き移ってきている。(竹内, 2010) Keirsey & Bates (1984) は「人は基本的なところで違っている。異なるものを欲しがると、異なる動機、目的、目標、価値観、要求、動因、衝動、欲望を持っている。」(p.2、著者訳)と主張する。学習者と教師の学習スタイルの違いが教授上の問題を引き起こすことが指摘されている。(Oxford, Ehrman & Lavine, 1991) 外国語学習者の多様性の理解と教育における対応は重要課題の一つと言える。(河合, 2010)

(2) 学習者論研究と授業実践の融合

新学習指導要領に、英語の授業を英語で行うことが明記されたが、日本人学習者の内向的学習スタイルがコミュニケーションな英語学習を困難にしているという指摘がある。(O'Sullivan, 1992) 自律学習は環境に対する無意識の領域まで含めた生物としての人間の適応現象ととらえることができる。(Kawai, Oxford & Iran-Nejad, 2000; 河合, 2000; Kawai, 2000, 2001, 2008) 竹内 (2010) は、「『外国語を学ぶということは、断片化された能力を獲得するという行為ではなく、全人格 (whole person) 的な成長につながる行為、あるいは、そのための過程なのだ』という考えを持つべき時代が到来した」と述べている。

日本人の内向的な学習者は対面での英語使用に抵抗がある。(河合, 2009) こうした学習者に対して、簡易形式のディベートは次のような利点がある。(Kawai, 2008)

発話する時間が指定されているので、turn taking を考えずに発話に集中できる。

事前準備が可能なので、認知的負荷と同時に心理的負荷を軽減できる。

同じ内容を何度も話すことができる。

以上から、この活動が内向的学習者の授業内英語使用への適応に貢献すると考える。

2. 研究の目的

本研究の目的は、英語による英語授業への適応に内向的学習スタイルが影響を与えるか、簡易形式の英語ディベートを通して内向的学習スタイルの変容が見られるかを考察することにある。本研究により内向的学習者の英語による英語学習への対処法について示唆を与えるとともに、集団的自律英語運用能力向上へ向けた学習ストラテジーの提供が見込まれる。調査は2段階に分けて行われた。

調査1では、日本人英語学習者の外向性・内向性の下位要因を探るとともに、この学習スタイルの質問紙開発を目指す。

調査2では、内向的英語学習者の英語による英語授業への適応の様子を見るために、調査1で開発した質問紙を用いて以下について考察する。

(1) 学習活動の種類が好き嫌いとの内向的性格傾向との間に相関はあるか。

(2) ディベート授業の前後で、学習活動の種類が好き嫌いや内向的性格傾向に変化があるか。

(3) ディベート授業の前後で、学習活動の種類別情意反応(楽しい・苦痛である)に変化が見られるか。

内向的性格傾向の高い学習者は、英語による言語活動を好まない傾向が予想される。ディベート学習を経験することで、内向的学習者も、適応により英語による言語活動を好み、楽しさを感じる傾向が増加することが予測されるが、性格は比較的安定した学習スタイルなので(Carisma, 2008; Curry, 1983) 内向的性格そのものの変化は少ないと思われる。

3. 研究の方法

(1) 調査1：外向性・内向性の因子分析と質問紙の開発

参加者

参加者は、北海道の4年生大学で2011年1学期に英語必修科目を履修した1年生69人(男44人、女25人)、英語選択科目を履修した2年生25人(男20人、女5人)、英語科教育法科目を履修した2年生から4年生までの19人(男10人、女9人)の計113人(理系84人・文系29人)である。調査の趣旨を説明して参加同意を得た103人から質問紙を回収した。うち留学生3人の回答を除外して100人のデータを分析に使用した。

質問紙

質問項目は、Reid (1995) に掲載された Style Analysis Survey (SAS: Oxford)、Perceptual Learning Style Preference Questionnaire (Reid)、Classroom Work Style Survey (Kinsella & Sherak) から内向性・外向性に関連する項目を計44項目抜粋し、日本語に翻訳した。もとの回答法は、それぞれ4件法、5件法、2件法であったが、本研究では形式を統一するために「強くそう思う」から「全くそう思わない」までの5件法とした。

データの収集と分析

調査者本人が調査趣旨を説明して質問紙の配布、回収を行った。所要時間は20分から30分であった。回答の記入にはマークシート用紙を使用し、スキャナで読み込んでテキストファイルで保存したのち、PASW Statistics 18 を使用して分析した。項目別の天井効果、フロア効果の検討後、初回の因子分析では、第3因子と第4因子の固有値の差が前後に比べて大きく、また回転前の第3因子までの累積寄与率は44.19%であった。スクリープロットも同様の傾向を示していたので、因子数を暫定的に3とした。次に、

主因子法、プロマックス回転を用いて因子分析を繰り返した。共通性は2.0、因子負荷量は4.0を目安とし、あわせて複数の因子への負荷量も考慮しながら8項目の削除を行い、最終的に、第1因子12項目、第2因子10項目、第3因子12項目を得た。

(2) 調査2：内向的学習者の適応

参加者

参加者は、北海道の4年生大学で2012年2学期に英語選択科目を履修した58人である。9名が学期中に履修を取りやめ、2人が2回のデータ収集時にどちらも欠席した。残りの47人(1年生男28人・女17人、3年生男1人、4年生男1人)のデータを分析に使用した。

質問紙

調査1で作成した質問紙32項目の他に、授業時の学習活動(例：みんなの前で英語で発表する)に対して、5件法(5:とても楽しかった 1:ひどく苦痛だった)で解答する10項目を付け加えた。

教育介入(授業の内容)

英語演習中級として開講された英語ディベート2クラスで、29人ずつ履修希望者があった。論題は「小学校英語教育の是非」と「原発廃止」であった。3~4人1チームで、各クラス8チーム編成し、賛成、反対、司会・計時、質疑応答質問、審査の担当に分け、試合はすべて英語で進行する。試合時間は約30分。ただし、準備においては日本語使用が混じるため、授業活動がすべて英語というわけではなかった。全員が賛成・反対2試合ずつ経験するように試合スケジュールが組まれた。

データの収集と分析

質問紙によるデータの収集は履修者が決定した3週目と、学期終了時の2回行った。調査者が研究の趣旨を説明して質問紙を配布し、回収した。所要時間は20分から30分。回答の記入にはマークシート用紙を使用し、

スキャナで読み込んでテキストファイルで保存したのち、SPSS10.0J を使用して分析した。

研究課題 1 については、3 項目群間の相関を、授業前後それぞれについて算出した。研究課題 2 については、3 項目群それぞれの合計点と平均を算出し、平均値と中央値の比較、歪度、尖度、ヒストグラムの形状、正規性の検定方法であるシャピロ-ウィルク検定などにより、得点合計のデータ分布が正規分布に近いと判断して t-検定を行った。研究課題 3 については、授業時の活動に対する情意反応を見る項目 10 項目を主成分分析にかけ、成分抽出後の共通性が他の成分に比べて低かった 3 項目 (0.7 未満) を削除し、残りの 7 項目で信頼性を算出した。この 7 項目で再び主成分分析を行い、成分 2 つを抽出した。得点係数を算出して主成分得点を得た。授業前後で主成分得点の上昇した者を適応傾向ありとし、そうでない者をなしとした。次に、内向性・外向性の性格的性向それぞれの項目合計点の差が 4 以上の者を対象に内向型、外向型のグループを作り、間のグループを中間型とした。性格的傾向と適応傾向でクロス集計して検討した。

4 . 研究成果

(1) 調査 1

調査 1 では、Reid (1995) に掲載された 3 つの質問紙から内向性・外向性に関連する項目を抜粋して質問紙を作成してデータ収集し、因子分析を行った結果、3 因子を抽出した。

分析の結果、第 1 因子は、「この授業では、小グループで勉強する機会が恒常的にあればいいなと願う。」や「グループで勉強するのは、たいてい時間の無駄だと感じる。」のようにグループ活動に対する感情に関わっていたので、この因子を「学習での共同作業・グループ活動への嗜好性」と命名した。

この項目群は、外向型学習活動への嗜好性を示していると考えられる。第 2 因子は、「自分ひとりで勉強する方が好きだ。」「一人で勉強した方が、よく学べる。」などの項目を含むことから、「学習での単独作業・個人活動への嗜好性」と命名した。この項目群は、内向型学習活動への嗜好性を示していると考えられる。第 3 因子は、「私は、たやすく新しい友達を作ることができる。」「大きいグループの中にいると、私は黙っている傾向がある。」などを含んでいるので、「性格上の外向的・内向的性向の違い」と命名した。つまり、内向性・外向性の性格的傾向を示している。

逆転項目の処理を行ったあと、各因子の Cronbach α を算出した。いずれも 0.8 を上回る十分な信頼性を示した。

(2) 調査 2

調査 1 で作成した質問項目を調査 2 のデータで再度検討した。天井効果、フロア効果は見られず、また、質問紙の 3 因子の項目群それぞれに、 $\alpha = .908$ 、 $\alpha = .756$ 、 $\alpha = .797$ の信頼性を得たので、項目を削除せずにこのまま分析を行った。

3 項目群の相関では、授業前後ともに、第 1・第 2 因子の項目群と第 3 因子の内向性・外向性の性向との相関は見られなかった。

授業前後における 3 項目群の合計点の変化では、t 検定を行ったが有意な結果を示さず、効果量 d 値もわずかであった。

第 3 因子の内向性・外向性項目群を用いて、性格的な傾向を分類したところ、外向型 15 人、中間型 12 人、内向型 14 人となった。授業活動に対する情意反応の検討に使用した 7 項目の信頼性は、 $\alpha = .867$ となった。主成分得点の授業前後の変化をもとに適応のある・なしを判断し、性格分類 3 グループと適応傾向のある・なしでクロス集計した結果、学習活動全体としても、外向型学習活動、内向型学習活動においても、性格分類に関わら

ず、統計的有意水準には達しなかったものの、適応を示す傾向があることがわかった。

以上の結果から、学習スタイルの性格的要因である内向性・外向性は比較的安定した要因であることが確認された。しかし、今回の調査で得られたデータにもとづけば、内向性・外向性の傾向と学習活動への嗜好性との関連はそれほど高いわけではなかった。また、有意水準 ($\alpha = .05$) を満たすことはできなかったが、性格的な違いに関わりなく、学習活動に対する適応を示す情意反応の変化が傾向として見られた。

今回の調査においては、データの収集に選択授業科目を利用したため、英語によるディベート活動に対する抵抗感の強い学習者が最初から除かれてしまっていた可能性がある。このために、内向性・外向性の性格的な傾向と学習活動の嗜好性との相関や、事前・事後の情意反応の変化において、統計的な有意水準を満たす結果を示さなかったことが考えられる。しかし、傾向としては予測した方向性を見せているので、今後研究計画を改善しながら研究を続けていくことで、ジャーナルに採択の可能性が見込まれる成果を伴った研究結果を得ることが期待できる。

なお、内向性の強い学習者の適応の様子についてインタビュー調査を行う予定であったが、当該学期の英語ディベート授業2クラス履修者が3名、および5名と少なかったため、1,2年目の学習者と授業運営方法を変更せざるを得なかった。予定を変更して2年目に収集したデータを使って、調査2の性格的傾向と学習活動に対する適応の分析をさらに精緻化し、当該分野の学会で発表を行った。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[学会発表](計 3件)

河合靖, 「学習者の外向性・内向性と英語による活動への適応」, 第39回全国英語教

育学会北海道研究大会, 2013年8月10日・11日, 北星学園大学(札幌)

河合靖, 「日本人英語学習者の外向性・内向性に関する因子分析」第38回全国英語教育学会愛知研究大会, 2012年8月4日・5日, 愛知学院大学日新キャンパス(愛知県日進市)

Kawai, Y., "Factor Analysis of Introversion among Japanese Learners of English", The Third Pacific Rim Conference on Education: Teacher Education and Professional Development, 2012/7/7-8, Hokkaido University of Education, Sapporo.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

河合 靖 (KAWAI, Yasushi)

北海道大学・大学院メディア・コミュニケーション研究院・教授

研究者番号: 60271699